胡風與矢崎彈

——以在中日戰爭爆發前夕雜誌《星座》的嘗試爲主—

近　藤　龍　哉

胡風就自己與日本進步評論家矢崎彈的交流，寫過一篇回憶文章＜憶矢崎彈——向摧殘文化的野蠻的日本政府抗議＞，發表於1937年9月，即中日戰爭爆發後胡風創刊的《七月》（週刊）第三期（1937. 9. 25）。矢崎於同年5月訪問上海，並與胡風多次会談，當時通過文學暢談，相互留下了深刻印象。胡風接到強烈希望與中國文壇進行交流的矢崎卻因此而遭到日本官憲逮捕的消息後，寫下了這篇文章，如實地記述了與矢崎的交流，並證實其交流幾乎完全是與文學相關的，對在所謂“憲政”下的日本，濫用權利將其逮捕的日本政府的野蠻行爲提出了強烈抗議。

有關與矢崎的交流，胡風在名譽恢復後所寫的《回憶錄》中僅略微涉及，其眞實情况仍不太明確。造成這一現狀的原因主要有：矢崎彈的評論活動自1932年至1946年的15年主要集中於戰爭時期，戰後幾乎未能活躍即死去；由於矢崎無論是左還是右都不処於日本文壇的中心，而是從獨特的位置從事評論活動，其在戰後的日本並不怎麼受關注,因此對其的研究也無進展。另外加上同人雜誌《星座》又是極不易看到的資料。

此次我想以胡風的這篇文章爲綫索，並盡可能根據當時的資料，搞清其交流的眞實情况。這次我有幸看到了以下新資料胡風受矢崎之約所寫的、發表於矢崎主辦的《星座》雜誌上的日語文章〈我的心境〉、登載在《星座》上的矢崎彈的上海滯留日記、歸國後的矢崎發表於日本的雜誌等刊物上的文章、矢崎在上海與王統照交換《星座》和《文学》雜誌的特約關系、籌劃雜誌交換的詩人五城康雄

（《星座》同人）謀求中日文學交流的文章等。我想根據這些新資料，闡明矢崎彈究竟是一個什麼樣的評論家？他是以何目的訪問上海的？訪問又是在怎樣的社会狀態下進行的？在上海進行了哪些活動？回國後的交流經過如何等問題，並試圖考察這種交流具有什麼樣的意義。

胡風と矢崎弾

――日中戦争前夜における雑誌『星座』の試みを中心に――

近藤龍哉

胡風は日本の進歩的評論家矢崎弾[1]との交流について、回想の文章「憶矢崎弾――向摧残文化的野蛮的日本政府抗議」を書いている。この文章は一九三七年九月、すなわち日中戦争勃発直後に胡風の発刊した『七月』（週刊）の第三期[2]に掲載された。矢崎は、同年の五月に中国文壇との交流の目的をもって上海を訪れ、中国の作家や詩人と交流し、胡風とも数度の会見の機会があった。矢崎は、文学への熱い会話を通じて胡風に深い印象を残していた。胡風のこの文章は、矢崎が、その交流を理由に日本の官憲に逮捕されたとの報に接し、矢崎との交流をありのままに記し、それが「左翼運動の連帯提携」といった政治的なものではなく、極めて文学にかかわる内容のものであったことを明らかにすると同時に、「憲政」下の日本でありながら、権力を振り回して逮捕に及んだ日本政府の蛮行に対する強い抗議を表明するものであった。

矢崎との交流について、他には自身が名誉回復後に書いた「回想録[3]」及び「我做的一些中日文化交流工作[4]」でわずかに触れているだけである。日本では矢崎自身についての研究が少なく、その中国文学者との交流についてはほ

とんど明らかにされてこなかった。[5] その理由としては、矢崎弾の評論活動が、一九三二年から一九四六年の十五年間で、主に戦中に集中し、戦後はほとんど活発な活動を果たさず死去してしまったこと、矢崎は左右を問わず日本の文壇の中心にはおらず、独特の位置から評論活動を行なったことから、戦後の日本においてはあまり注目されず、したがって研究も進んでいないことがあげられよう。それに加えて、彼の主宰した雑誌『星座』が極めて目に触れにくい資料であったことによる。

今回私は、この胡風の文章を手がかりに、可能な限り当時の資料に即して実態を明らかにしようと考えた。この度、①胡風が矢崎に求められて矢崎弾の主宰する雑誌『星座』に発表した日本語による文章「私の気持」（我的心境）、②『星座』に発表された矢崎弾の上海滞在中の日記、③帰国後の矢崎が日本の雑誌等に発表した文章、④矢崎が上海で王統照と取り交わした『星座』と『文学』との特約関係、⑤それを準備した詩人の五城康雄（『星座』の同人）の日中文学交流を求める文章など、新たな資料を眼にすることができた。こうした資料を踏まえて、矢崎弾とはいかなる評論家であるのか、いかなる目的で上海を訪れたのか、それはいかなる社会的状況のなかで行なわれたのか、上海でいかなる活動を行なったのか、帰国後の交流はどのような経過をたどったのかを明らかにし、この交流にどのような意義があったのかを考察したい。

一　矢崎弾について

胡風は、「憶矢崎弾」のなかで、矢崎との出会いの前の一つのエピソードを伝えている。

一天鹿地亘対我説，有一個叫做矢崎弾的到上海来了，大概想見見中国作家，但聴説他是提唱〝日本的東西〟（即認日本民族的特点為最好的東西之意）的，所以打算給他一箇封鎖。我従来没有聴到這名字，当時笑着回答「他提唱〝日本的東西〟，但我們這里只有所謂〝支那的東西〟，我們当然用不着見面了！」……但三四天之后再見到鹿地的時候，他説已見過矢崎，従前所聴到的是謡伝，這人思想結実，脳子鋭敏，雖然還衝不過某種限界，但対於日本文壇和日本文学伝統持有很透辟的見解，臨末是問我可否見一見，矢崎自己托他致意，如果聴到別人説過他是提唱〝日本的東西〟的，希望我能够相信那是誤解云。

（ある日のこと鹿地亘から、矢崎弾という男が上海にやって来た、おそらくは中国の作家に会おうと思っているのだろうが、「日本的なもの」（つまり日本民族の特徴をもっともよいものとすることを意味する）を提唱しているのだそうだ、だから誰にも会わせないようにしようと思う、と言われた。私はそれまでそんな名前を聞いたことがなかったので、その時は笑って、「日本的なものを提唱するなら、我々のところには中国的なものしかないのだから、もちろん会うにはおよばない」と答えた。しかし、二三日後に鹿地に会った時には、もう矢崎とは会った、以前聞いたことはデマだった、この男の思想はしっかりしていて、頭もきれる、ある種の限界はあるが、日本の文壇と日本文学の伝統に対しては透徹した見解をもっている、ということだった。最後に、会ってみてはどうか、矢崎自身からも、もし日本的なものを提唱していると誰かから聞かされているならそれは誤解だとわかって欲しい、とくれぐれもいわれたと言った。）

ここから、最初は胡風も鹿地亘も、矢崎に対しては面識がなく、「日本的なもの」を提唱する民族主義的な人物と見ていたことがわかる。矢崎は胡風と同じく慶応大学英文学科の出身であったが、在学時期がわずかにすれ違ってい

た。矢崎は、胡風の入学する一九三一年に慶応大学を卒業、中央新聞社（『絵入朝野新聞』に源を発する小新聞社）に勤務するかたわら、文学活動を続けた。慶応大学出身者が主に拠った『三田文学』を中心に時評や評論を書くほか、有力文学雑誌である『新潮』や『文芸』に寄稿した。渡辺憲が指摘するように、「プロ派への懐疑と新文学（横光など：筆者）への関心が初期の評論の特徴」[6]であった。まもなく新聞社を辞め、「一九三四年から文筆活動に入り、おりからの文芸復興の波の中で堅固な文体と旺盛な批判力を軸に明確な主張を展開した。……感性優先の日本的思考から抜け出し、『観念』による統一を志向、リアリズムの真のあり方を追求して第一評論集『新文学の環境』を刊行……その後、行動主義に共鳴して『行動』に寄稿、また『星座』にも参加した」[7]。矢崎は、上海へ渡航する直前の一九三七年四月二十日に、第二評論集『過渡期文芸の断層』を刊行したばかりであり、この頃は文芸同人雑誌『星座』の中心人物として活発に行動し発言していた。

矢崎の二冊の著書はいづれも雑誌に発表した評論や作家論、文壇時評と言ったものを集めたものである。矢崎の文章は独特で概括しにくいが、いづれかの文学理論や方法論の肩を持つというのではなく、現に起こっている文学現象の中に見える文学者の怠惰や弱点に対して、とりわけ日本的な感傷主義、理論軽視、主観の欠如や成り行き任せに対して容赦ない批判を加えている。さらに、こうした傾向が再生産され常識となっている文壇に染まっていない、現実に対応した骨太な個性的な新しい作品への期待が熱く語られる。同人雑誌と新人に対する支援の姿勢は明白で、文壇に認められる僥倖を期待せず、自らの書きたい作品を情熱を持って書ける場所である同人誌の発展のためにとして、自ら呼びかけ人となって同人雑誌クラブを作り、その機関紙を発行し、さらに同人雑誌クラブ賞を設立し、一九三七年二月には最初の選考を実現していた。

このような経歴をもつ矢崎が、なぜ「日本的なもの」の主唱者と言う誤解をされたのであろうか。同年二月に、上海で発行されていた日本語の新聞『上海日報』に「矢崎弾は三田文学を根城に〈日本的なもの〉で民族文芸の樹立を唱へている新進気鋭の若手評論家」として紹介されており、[8] そのことがおもな原因となったのだろう。「三田文学を根城に」は、二、三年前の状況であり、矢崎が〈日本的なもの〉への強い関心を持っていたことも事実ではあるが、矢崎はむしろ、日本的思考の弱点とそこから来る日本の現代文学のリアリズムの畸形化をこそ問題としていたわけで、「民族文芸の樹立を唱えている」という記事はデマに近く、矢崎にとってたいへん迷惑なものであったろう。しかも、出所が矢崎の上海滞在に力を貸した日高清麿瑳の勤める『上海日報』であったとは、一体どうしたわけであろう。

胡風は、一九三三年六月に日本から強制送還され帰国した後も、日本の文学動向に注目し続けた。自らもその一端に参加した日本のプロレタリア文学運動は、胡風の帰国と前後してすでに組織は解体し、非合法的な運動の可能な時代は終わろうとしていた。『文化集団』（一九三三年六月～一九三五年二月）、『文学評論』（一九三四年三月～一九三六年八月）、『文学案内』（一九三五年七月～一九三七年四月）などプロ文学運動の流れを汲む雑誌が次々に生まれたが、胡風はその中から必要と感じたものをその都度翻訳し中国に紹介している。日本におけるプロ文学以後の運動の形態や可能性についても注意を払っていたことはまちがいない。

たとえば「行動主義文学論争」であるが、フランス知識人の行動的ヒューマニズムを紹介してそのきっかけとなった小松清の「仏文学の一転機」（『行動』一九三四年八月号）も、マルクス主義の立場から批判側に立った大森義太郎の「現代知識階級の困惑」（『改造』一九三四年十一月号）もともに翻訳し中国に紹介している。[9]

矢崎はもともとプロレタリア文学運動には批判的な位置にいたが、じつはこの頃、この行動主義文学に接近し『行

動』に文章を書いている。やがて、一時的流行のように流れが去ろうとした時にも、『星座』の誌上で公開状による批判などを通じて、行動主義の内実を強化するために働きかけている。

歴史的に見れば、行動主義文学は、プロ文学敗退後に芸術派とプロ文学派という旧来の分類を超えたあらたな次元の運動の萌芽としてあったことはたしかであり、ファッシズム到来の時代における意味ある運動の一つであったと私は考える。

鹿地亘が、「ある種の限界はありながら」としながらも、矢崎の日本文学と文壇に対する見解に優れたところのあることを見抜き、胡風が矢崎をボイコットせずに話し合うという結論を出したのは幸いであった。

二　矢崎弾の上海行きの目的

さて、矢崎の上海行きには、大きく言えば二つの目的があったといえるだろう。その第一は、自らの生活と文学認識の再構築の契機である。矢崎自身にとってはもっと漠然とした期待と言ったほうがよいかもしれない。

矢崎は、一九三七年五月十二日、東京駅で見送りに来た友人たちに囲まれる。

「上海は物騒だから、とても生きて二度と帰れまいといふもの、一体目的は何かと訊問するもの、何かはつきり掴んで来たまへとさとすもの、旧支那の幻想に浸つて、まぶたを細めながら羨望するもの、僕はそれらの一切に大仰な、実利的な結論的な日本的な習慣を読むだ。僕は、漫然とひとり上海をさ迷ひ歩きたかつただけだ。文壇的垢を洗ひ流して生活と文学のマンネリズムが少しでも破壊さればよいと考へてゐたのに過ぎない。ところが、出発前に、僕は大

仰なポオズである種の責任観を要求されたやうに思ふ。未熟な評論家、日本、支那、文化交流について、僕の自意識は一層苛立ち、軽い嘲笑と、憤怒と、見ぬ前の幻滅とに脅迫された[10]」

何事に対しても常識的解釈を許さず、一層掘り下げて真実に達しようとする、矢崎の評論に特徴的な態度が読み取れるであろう。しかし、同時に、時に過度なまでの繊細さが周囲との壁をなしている様子も現れている。同じ日記の後半では次のようにも書いている。「僕は上海に渡る際に東京で同様に人工的出帆をもくろんだ。上海に行くといふ前触ればかりで行けない危険が一杯あつた。僕は行くか行くまいかと迷つた。然し、この旅行が現在の僕を多少でも改造するだらうといふ夢を信じた。その信仰に従順に、僕は人工的強制のわなを造つた。誰彼かまはず吹聴した。僕は噂にせき立てられる様に東京を蹴つた[11]」。とすれば、「大仰な」期待が周囲に生じたのは、彼自身作り上げたともいえる。

第二の目的は、中国文学界との交流である。矢崎自身大きな期待をもっていたには違いないが、上記の引用文には、周囲の期待として描かれている。それは、当時、緊張する日中関係のなかで、文壇ジャーナリズムの中に日中文学交流の気運のたかまりが生じつつあり、『星座』は、それに乗じるように、自らを特徴付ける一つの方針としてこの方向を明確に持ったことによる。

『星座』は、一九三五年四月に、石川達三、秋山正香、北原武夫、中村梧一郎ら十三人の若手の文学者によって始められた同人雑誌ということになっている。彼らは『新早稲田文学』と『三田文学』の流れを汲むものの、同人として方法や主義をかかげることはせず、創刊の言葉も「同人言」として、一人一人が自分の希望や決意を述べているにすぎない。創刊号に発表された石川達三の小説「蒼氓」が、新設されたばかりの新人文学賞である第一回芥川賞を受

賞するに及んで注目され、同人に加わるもの多く、同年中に二十五名に達した。書誌的に見る限り、同人名の一覧に矢崎の名が並んだことはなく、編輯人発行人にも名を出しておらず、編集後記にはいつも「矢崎から寄稿」と記されている。しかし、この雑誌の活気は、多分に論争的な矢崎弾の健筆とその批評精神に負うところが多かった。また、芥川賞の選考に際して果敢に石川の作品を売り込んだこと、他の同人雑誌に呼びかけ説得して、同人雑誌クラブを結成しクラブ誌を発行したり、賞金の出資者を募って同人雑誌クラブ賞を作りその選考にあたったことなどから、同人のなかにも矢崎を当初から「中心になって編集した」と回想する人もいる。[12] しかし、当初からの同人である秋山正香への矢崎の私信を読む限り、その創刊準備から終刊にいたるまで、実は一貫して矢崎がこの雑誌を主宰しその方針のもとに編集されていたことがわかる。少なくとも一九三七年のこの時、矢崎は、同人の山本和夫と組んで『星座』の編集にあたり、また資金集めにも中心になって力を発揮していた。[13]

この行動的な矢崎が、一九三七年という時代環境の中で新たに取り組もうとしたのが日中の文学交流であり、そしてそのきっかけを作ったのは、中国経験があり以前から中国の新文学に関心を持っていた詩人の五城康雄であった。

三　魯迅逝去後の中国文壇への関心の高まりのなかで

これまで、日中の文学交流は、中国文学研究会などの研究者や留学生を別にすれば、主にプロレタリア文学系の人々を中心に行なわれてきた。まれには佐藤春夫や谷崎潤一郎などの大御所の文人もいたが、文壇を巻き込むことはなかった。

ところが、魯迅の逝去が、日本の知識人と文壇ジャーナリズムのなかでセンセーションを起こし、中国文学への文壇的関心が一挙に強まった。改造社が『大魯迅全集』の刊行[14]に踏み切ったことはその一例である。一方、一九三七年に入り、日中関係の緊張はいよいよ強まり、日本の文学者知識人の中には一種の危機感が高まりつつあった。これらを反映して、『報知新聞』は、一九三七年一月、「文学者の対支関心」という特集を行い、張赫宙、中野重治、佐藤春夫を登場させてそれぞれの立場から中国認識を語らせている。[15]

これを受けた形で、『星座』一九三七年三月号に、五城康雄の「日支文壇の交流を望む」[16]が掲載される。五城は、『報知新聞』のこの特集を、「そのアツケなさに呆然として、しばし感服仕つたことは仕つたが極めて時機を得たものであつた」と、その内容のお粗末さを揶揄するようなコメントをした上で、日本の文学者の中国に対する姿勢を批判した。目的もなしに何かのついでに中国を訪れる文人の態度を、「魯迅は生前こういう手合いが一番嫌いだつた」と批判し、「せめてパアル・バツク位に一つの目をもつてもらいたい」と注文をつけた。また、中国の呼称とその裏にある認識の違いを問題にし、「支那」という言葉に重なる侮蔑感の撤廃と「中国」に対する新しき認識を要求し、特に「現代支那の民衆心理の推移と、インテリ階層特にインテリ青年の感情や社会的地位について」の理解不足を指摘した。本題の「日支文壇の交流運動」については、「これまで日本の文芸壇は中国現代文壇に対して極めて冷淡か、白痴的か、衝動的でさへあつた」として、「個人的交際はあつたが、文壇対文壇の交流がなく、魯迅の一端を知るだけだつた」、「もつと見るべき作家、作品がある。もつと知るべき文学運動がある。さらに社会文化運動がある」「今日破局的窮乏の底にある現代支那農村を扱つた作品には相当いいのも見えるし、魯迅が起こして今日の隆盛を得た版画運動や、新劇運動、漫画運動なども是非紹介されねばならぬ」などと述べた。この文章は、のちに中国の『文学』に翻訳、掲載

された。

五城康雄は、白鳥省吾門下で『地上楽園』によった海洋詩人である。一九三〇年八月に最初の詩集『五城康雄詩集』が友人月原橙一郎の編で刊行されている。海軍の主計士官であった五城（本名矢野兼武）は、長く中国の各地に滞在したらしい。一九三六年十二月に帰国、すぐに中国文学研究会に入会の手続きをとり、[17] 二月十七日には、竹内好を訪ねて話を聴いてもらっている。[18]「日支文壇の交流」は、二月三日に執筆とあるので、そのことを竹内に訴え賛同を求めた可能性が強い。五城は、ほぼ同じ頃中国の雑誌『文学』編集部宛に中国語の手紙を寄せ、自らの所属する日本詩人会[19]及び東京詩人倶楽部[20]の中国新詩人団体との交流の希望とその斡旋を依頼している。[21] また東京詩人倶楽部から『中国現代詩選』を出版する予定であること、そのために新詩人と詩集を紹介されたいとの希望が並べられている。つまり、五城にあっては、両団体の意向を受けて中国詩壇と交渉する役割を与えられ、中国詩壇を代表するものが、さし当たっては詩にも重きを置いている『文学』だったということになる。この手紙の中で『星座』に発表した文章のことが触れられており、「日支文壇の交流」の持論が示されている。

五城がいかなる経過で、その活動場所を『星座』に求めたかはあきらでないが、『星座』メンバーの詩人たち、田中令三、山本和夫、一瀬直行が、日本詩人会と東京詩人倶楽部で活動していたことと関係しているであろう。[22] とりわけ一瀬は、五城が初めての詩集を出した時に読後感を『地上楽園』に発表しており、よい理解者であったから仲介の労をとったかもしれない。[23]

五城はまた、胡風の「張天翼論」を翻訳してもいて、『星座』五月号と六月号に連載されている。「目下、張天翼は殆どどの文芸誌にも毎月名を出してゐるのでとり上げた」と注をつけ、人気作家ゆえに紹介したという意図を説明し

ている。また、論文筆者の胡風についてコメントし、「魯迅に私淑している評論家であり、詩人でもある」としたうえで、「私は昨年胡風と街をあるきながら話したことがある。風采怪偉（ママ）、青い薄よごれの長い支那服で平然と歩いてゐた。何か揚子江のもつ不可解な大きさを印象してゐる」としており、胡風と面識のあったことが知れる。そのほかに、由来は不明だが『五城康雄詩集』一冊が魯迅の蔵書のなかにあり、五城本人によると思しき書き込み（推敲のあと）があることが確認できる。

五城の文章には、「一九三六年十二月まで上海に滞在してゐた」こと、「幾年か支那に住み、幾度か支那に渉つて支那の各地を歩き、いろいろの階級の人々と接したり、いろいろの相を見てきた」ことが書かれているが、それが軍人としての経験であることは山岸嵩氏の論文[24]で知った。

四　矢崎の上海滞在と胡風との交流

一九三七年五月十四日、長崎丸で神戸港を離れた矢崎は、十六日午後四時半、上海匯山碼頭に上海日報編集長日高清麿瑳の出迎えを受けた。以後帰国まで施高塔路花園里九号の日高の家に逗留し、日高の案内で上海生活を送ることになる。翌十七日、内山書店の内山完造を紹介される。十九日には、上海毎日新聞の河野さくらに紹介され、上海日日新聞の児島博の案内を得ている。鹿地亘に合うのは二十日、その鹿地の斡旋で胡風と初めて会見したのが二十二日、上海に来て一週間目のことである。このとき矢崎は、出版したばかりの著書『過渡期文芸の断層』と雑誌『星座』を胡風に贈っている。[25]

胡風は「憶矢崎弾」で、最初の会見の内容を次のように要約している。

除了回答他中国新文学的要求和伝統的桎梏是在怎様一種相克的情形下面這一問題以外，第一，他充分地承認了魯迅的雑文在文学史上所開拓的戦闘伝統；第二，対於中国新文学，他読過茅盾的《動揺》，《追求》，従那里看出中国新文学是直接地接受了西洋文学的現実主義的精神，不像日本文学似地走入了歪路；第三，関於所謂〝日本的東西〟帰根到底就是所謂〝物之哀〟，而〝物之哀〟就是対人生妥協的態度……但最使我感到興趣的是従他聴到了日本文壇的内幕，也就是圧迫新生力量的文壇勢力的分布地図[26]

（彼の、中国新文学の要求と伝統の桎梏がどのような相克の状況下にあるかという質問に答えたほかには、第一に彼は、魯迅の雑文が文学史に新たに開いた戦闘的伝統を認めた。第二に、中国の新文学については、茅盾の「動揺」「追及」を読んだことがあり、そこから中国の新文学は直接的に西洋文学のリアリズムの精神を受け入れ、日本文学のように歪んだ道を歩んだのとは違うことがわかったこと、第三に、所謂〝日本的なもの〟とは、結局のところ〝もののあはれ〟のことで、〝もののあはれ〟とは人生に対する妥協的態度である…けれども私がもっとも興味をひかれたのは、彼から聞いた日本文壇の内幕、つまり新しく生まれた力を圧迫する文壇勢力の分布地図であった。）

矢崎は中国の作家に会う前に二つの問いを用意していた。「伝統と近代精神との相克」と「今日における表現」の問題である。いづれも矢崎自身が日本で悩みぬき、今日の新文学のもっとも切実な問題であることを信じていたことであり、それをまず最初に会うことになった胡風にぶつけたのである。しかし、矢崎の目論見はある意味では外れてしまった。

「僕はこれらの問題について中国における伝統の大きさと桎梏の強さを予想し現代の新人が今日の現実を描くにいかに苦悶し、いかに征服しつゝあるか、その実情を聴いてわれわれの助言たらしめたらと思つた…中国の新文学は完全に伝統を切断し、政治的情熱が文学を借りて表現されたのである。主として「ソヴエト」文学が輸入されてゐるといふが、その他の外国文学は乱脈に翻訳され統一なく読まされる程度で、誤つた移植に苦悩する日本文学と違ひ、まづ輸入し、模倣し、摂取に咽喉笛がなるといふ文学輸入の初期の情勢なのである」[27]

準備した二つ目の「表現」の問題に対して、答えとして胡風から返ってきたのが「雑文の現代的効力」だけだったことにも、矢崎は物足りなさを感じたようである。「表現」の問題を、矢崎は、「過去の小説形式がはたして今日の現実を包容しえるや否や、新しい小説形式が創造されねばならないという欲求」から持ち出したのだから。とはいえ、矢崎は、魯迅にとって、中国にとっては、「追われる身の忙しさ、短兵急を要する効果の点から割り出された文学の一形式なのであろう」と納得した上で、「今日における小説形式や時代的な表現の問題に多くの示唆を与へることは疑へない」とも付け加えている。

胡風が挙げた第二、第三のことは、多分最初の問題との関連で話題になったことではないかと推測する。先にも紹介したとおり、矢崎は日本の現代文学が畸形化の路を歩んできたという認識があり、それと対照的に茅盾の『蝕』があった。茅盾の『蝕』は、一九三六年八月に小田嶽夫の翻訳で『大過渡期』[28]という題名で出版されたばかりで、日本の文学界に中国の現代文学を見直させる役割を果たしていた。矢崎も、この後茅盾との会見が実現したとき、茅盾にその感想を問われ、「今まで紹介された中国文学中最も感動した。日本文学には歪みくねつて移植された西欧文学の精神と方法が実に素直にしかも健康に血を運ばせてゐる。『個人』の私的な発展とその社会的な発展との平行線を

縫ふことの困難を見事征服してゐるので、中国文学に目を見張つた最初の動機があの作品です」と面と向かって絶賛している。

「日本的なもの」についてのやり取りは、上海旅行が終わって『新潮』に発表した「中国で眺めた日本的性格」[29]という文章のなかで、「魯迅さへ没有法子といふ中国人の虚無感にはただならぬ嫌厭の言葉を絶へず洩らしてゐたといふが、天災と飢饉が植ゑつけたこの諦観は、日本的『もののあはれ』や仏教に培はれた独善的な諦観とは伝統も本質も隔りがあるだらう。日本的諦観はむしろ生活の享楽に連つてゐる、逃避的な自己保身から出発してゐる。だが、中国のそれは、窮極にまで闘ひ詰めたものの絶望の声なのではあるまいか」と書いていることと同様の趣旨であろう。

この後胡風は、偶然の機会を含めて三回の矢崎との会見の様子を記している。二度目はフランス租界の鹿地亘のアパートでの出会いだが、矢崎の『上海日記抄』から、それが翌日（五月二十三日）のことであることが知れる。鹿地亘夫妻に蕭軍、蕭紅夫婦、胡風夫婦、矢崎に日高と一同に会し、ロシア料理店で蕭軍と矢崎がウオッカを痛飲した。胡風は「那没有拘束的満座哄笑，似乎使矢崎非常興奮，臨末且出去買来了一箇表示敬意的鮮麗的花籃，説這様的集会在日本是做不到的。」（気の置けない笑いどよめく食卓は、どうやら矢崎を非常に興奮させたらしく、別れ際に外へ出たと思うと敬意を表すためと切花の花かごを買ってきて、こんな集会は日本ではありえないと言った）と書いている。矢崎もよほど心に残ったと見え、その有様をつぎのように書き留めている。

「ウオツカの酔ひにつれて茶目気の多い蕭軍しきりに洒落を飛ばし、鷲のやうに眼を輝かして皿の料理を仇敵のごとくに突刺す。僕が卓上に盛花を飾ると、蕭軍氏「ウツクシイ」を何度も繰返してお世辞のよいこと限りなし。…絶えず日本語に巧みな胡風の洒落が飛び、蕭軍またひとりで卓上を掻き回して僕にウオツカをすゝめる。日本

では得られない素朴な哄笑の伴つた食卓だつた」[30]

矢崎にとっては初めて中国の文学者たちとの打ち解けた晩餐だった。彼は、「中日文化交流の好転する機縁をつくる念願に一層拍車を感ずるばかりだつた」とこの日の記録を結んでいる。しかし、胡風は、贈られた矢崎の著作と雑誌『星座』から推し量って、「曉得他是在無気節的日本文壇上走着孤独的路（這時候我不禁想像了一下他的心境。」（かれが活気のない日本文壇で孤独な歩みをつづけていることがわかって、思わず彼の心境を想像してしまった）と同情している。数日後、矢崎は日高と魯迅の墓に詣でている。これまでの会見で、中国文学界での魯迅の存在の意味を重く受け止めたということだろう。[31]

三度目は六月四日、南京路の新雅の三階の茶室である。矢崎の希望で茅盾との会見の場を胡風が準備した。張天翼と鹿地亘夫妻と日高が同席した。先に引用した茅盾への賛辞はこのときのものである。この日も、胡風、茅盾は飲まず、張天翼と矢崎が盛んに乾杯し、帰り際に張天翼は覚えたての日本語で「サヨウナラ」を繰り返し矢崎を感激させている。矢崎の日記は「中国作家の中日文学交流を望むや切、僕また微力を省みず、交流の犠牲たらんことを約す」と記している。まさか、その「犠牲」がすぐに現実的な意味をもつことになるとは想像してはいなかっただろう。

四度目は、六月九日、矢崎帰国の前日である。矢崎は最後の一日を一人で歩きまわろうと思っていたが、鹿地亘から電話で呼び出され、日高と車で鹿地のアパートに出向く。そこへ、胡風も駆けつけてきて、一緒になって滞在を伸ばすよう勧める。「まだ話したらぬ事多し、と胡風氏頻りに友誼に厚い笑顔で僕を誘惑する。僕―は明朝の長崎丸を捕えねば、このまま上海の土となるとも悔のない予感さへ知つてゐる。歯を噛み、舌を歪ませて滞在延期の誘惑と闘つた」と矢崎は書いている。その晩は上海滞在中お世話になった「日高氏との最後の晩餐を余儀なく辞退して」、胡風、

鹿地夫妻らと食卓を囲んだのであった。最初に、鹿地が胡風に言った「打算給他一箇封鎖」（誰にも会わせないつもり）とは、全く正反対に、両者の友情は深まったのであった。

五　帰国後の矢崎、中国文学界との交流

矢崎は、六月十日午前九時、予定どおり長崎丸に乗船、上海に別れを告げた。翌十一日午後一時、長崎で下船している。「税関で中国の書籍調査で汗を流すこと三時間半」、そのため予定の急行に乗り遅れている。おそらくは中国の友人たちから贈られ持ち帰った書籍が、両国関係の悪化もあって厳しく検査されたのであろう。途中、どこかに立ち寄ったとみえて、東京に帰ったのは六月十五日[32]、ほぼ一ヶ月の旅であった。

上海旅行を終えた矢崎は、執筆に編集に会合にと、前にもまして旺盛な活動を開始する。先ず、六月二十一日の『朝日新聞』に短文を書いて、『文芸』での蕭軍と中野重治との往復書簡を枕に、中国では、知識人のすべてが支那といわれることに侮蔑感を感じており、「中国の再認識を要求されてゐる時、中日文化交流に少しでも思ひを潜める人は、今後『中国』を厳守し、大衆の『支那』概念を削減するやう努めねばならない」と訴えている[33]。

続けて六月二十五日から『報知新聞』に「中国の新文学瞥見」を連載[34]し、また『三田新聞』六月二十五日号に、「中国作家との会見―茅盾・張天翼との問答」[35]を寄せている。これらは翌月の『星座』八月号に「中国の新文学について」とまとめられて掲載された。

七月一日に発行された『星座』七月号には、すでに上海行きの成果が反映されている。雑誌の巻頭に、「日華文化

の交流と今後の星座」と題する二項目を掲げている。その一は、「雑誌『文学』との提携」で、中国でもっとも有力な文芸誌と紹介した上で、「A ,雑誌的交換 B ,好作品的相互介紹与翻訳 C ,両国文学的情形互易報告 D ,評論、作品、尤為重要」の四項目を中国語のまま掲げている。さらに「尚王統照氏は八月号に特別寄稿を快諾された」と付記された。その二は、中国の文学情勢の報告、問題作品の翻訳、中国作家との交渉を担当する上海特派員として、頼高富と日高清麿瑳の快諾を得たことが掲げられた。この頁の上半分には、声を上げている中国の民衆を描いた木版画が飾られ、「魯迅の熱意ある指導のもとに現代中国に流行しつつある版画藝術」の説明文がつけられている。[36] この号には矢崎の「上海日記抄」も掲載され、そこに、魯迅の墓に参った矢崎と日高の紀念写真が添えられていることもあわせて、本誌の姿勢を視覚的に示すものとなっている。山本和夫は編集後記で、「本誌は、別項の如く、中華民国の文芸雑誌『文学』と提携してすすむこととなつた。矢崎弾が上海旅行によつて齎した快適な土産だ。来月号から、彼の友国から――いや、われわれの新しい仲間から、作品が齎されるはずになつてゐる。初夏の風のやうに、われわれの胸は躍つてゐる」と書き、期待と喜びを表明している。この号は、竹内らの中国文学研究会にも贈られた。その機関誌『中国文学月報』の「文化消息」は「中日文学提携の機運」の見出しで改造社の『文芸』の取り組みと並べてこれを取り上げ、「同人雑誌『星座』は、中心的な矢崎弾の遊滬を機として中国の『文学』と結びその宣言を七月号巻頭に載せてゐる。『星座』の傾向からして特に『文学』を選んだのは単に偶然らしいが試みとしては悪くない。同人中には中国文学の紹介をする五城康雄もあり今後の努力を期待しておく。[37]」と評価した。

一ヵ月後、『星座』八月号は難産の末遅れてやっと発行された。最初の企画は、さながら中国文学認識特集号ともいうべきものになるはずであった。先ずは王統照から矢崎宛の「手紙」で、矢崎の手紙と『星座』七月号に対するお

礼、遅れた原稿を送る約束、五城康雄の文章を翻訳し発表する旨の伝言などが書かれている。一緒に『文学』七月号を送ったとある。因みに五城の文章は、『文学』八月号に掲載された。

次に、胡風の「私の気持」[38]で、執筆日時は「七七」事変の前の七月四日で、日本語による文章である。大意は、「中日文学の交流」について書けと求められたが、「今、中国文学から何を日本の読者に紹介していいのか」について、自分の係わってきた範囲で述べる。魯迅の提案で、改造社から現代中国の若い文学を日本に紹介することになり、魯迅の死後は魯迅全集を出すことになったが、それは世界文壇にのぼったなどと自惚れたからなどではなく、中国文学は未熟ながら「如何に虐められて居るか、如何に立ち上がりつつあるか、如何に失敗や犠牲を通じて自分自身を造り換えて居るかを、日本の読者特に進歩的読者に伝へたかつたのである」。「洪炉のやうに沸いて居る中国社会は多少とも文学作品に反映されて居り、そして日本の進歩的読者は必ずやそれに共鳴を持つだらう、と私たちは信じて居たからである」「如何に生活は文学を造ることかに対する同感をもみたいからである」ところが、「新聞や雑誌に現れる時評をみると、あまり問題にして呉れないやうに見える。特に左翼的批判家たちも触れやうともしなかつた様子に私はさびしさを覚えた」というものである。

興味深いのは、日本の反応、特に日本の左翼的批評家たちの反応のなさにに対しての不満が表明されていることである。プロレタリア文学時代に確信していた国や民族を越えての一体性という期待感が、胡風においてはまだ強く残っているように思える。

次に魯迅の「病中通信（抄）」で、これは魯迅の病中の手紙二通を翻訳したもので、訳者名は明記されていない。胡風編「工作與学習叢刊」『収穫』[39]の「病中通信」に収められた九通から、一九三六年八月六日の「時玳宛」と、

八月二十八日「楊霽雲宛」を選んでいる。この「工作與学習叢刊」は当然胡風より贈られ、矢崎の手を経て持ち帰られたものであろう。

さらに、郭沫若の「『もののあはれ』に就いて」で、『大晩報』に連載中の「創造十年続編」から五城康雄が翻訳したもの。郭が「聶嫈」を書いたときにアイルランド作家シングの影響を受けたことを打ち明けたついでに、シングの情調は日本の「もののあはれ」と類似するとして、続けて乃木希典の「錦州城外」の七絶を褒めたあと、このような心境はいまや日本では考古学ででも探さなければならない、と結んだものである。日本の国内で「日本的なもの」に関心が集まっているなか、この文章を載せたことにいかなる意味があったのか、おそらくは旅先で矢崎が眼にして保存してきたのであろう。あるいは中国文壇を紹介する上でのバランスをとった面もあるのかもしれない。

このほか、『星座』同人の四名が「魯迅略談」（近藤弘文）、「茅盾の『大過渡期』」（北原武夫）、「作家としての魯迅」（林逸馬）、「中国への文学関心」（羽田信勝）を書いている。

特に興味深いこととして、「日華文化の交流」という葉書アンケートの企画がある。青野季吉、中野重治、中村武羅夫、木村毅、神近市子、平林たい子、永松定、阿部知二といったすでに文壇で名を知られた人々が、『星座』の取り組についてどう考えるかというアンケートに答えていることである。中野は、『報知新聞』にすでに文章を寄せており、改造社の『文芸』七月号でも、蕭軍との間で往復書簡を発表しており、日華文化交流では先を行く活動をしていた。青野もまた、矢崎とは同県人でもあり、行動主義でも近しい関係にあったことから当然ともいえるが、その他の人々がよくこんな小雑誌に返事をくれたものという感が強い。さらに反プロレタリア文学の第一人者である中村武羅夫[40]が答えているのは注目に値する。

しかし、まさにこの企画の進行中に、「七七」事変は起こったのである。アンケートの最後に、編集部のこんな「あとがき」が付けられている。「日華文化の交流に就いてのアンケエトはすべて事変前の回答に属する。従つて急激な時局の展開に伴ひ発表を差し控へるべきが至当であるが、既に半ば組みあがつた後なので、諸家のご意見にも自ら変化があるであらうことを申し添へてをく」。編集部の狼狽振りは、山本の「編輯余録」にも「国際的な雲行が急を告げたので、誤解されることを避けて、編集は慎重を極めざるを得ず、幾夜か同人に集まっていただいて鳩首した」とある。

『星座』は、編集後記から見ただけでも、創刊号からもう「削除」の処分を受け、第四輯（一九三五年七月号）で「発禁」処分を受けている。[41]『日本近代文学辞典』の「近代出版側面史」では、一九三六年三月号も発禁となったとする。[42]ファッシズムの時代に、そうした国家権力の弾圧をかいくぐって、『星座』は次第に力をつけてきた。前号の山本の「編輯余録」で「前号は甚だ好評であった・・・『星座』が、やうやく仕事のできそうな軌道に乗つた現在」と表現していただけに、まずは雑誌の延命をはかるための対応策が練られたのである。

「誤解をさける」ための「慎重」な対応として、『星座』編集部名で、巻頭に「社告」をかかげた。

「われわれ『星座』は中国の文学雑誌『文学』と文学的交流を約し、それを機縁に日華文化の交流を画し、小誌を日華両国の文化的提携の揺籃たらしめんと希望し、日華両国知識人の融解談合の機会を求め両国国情の理解を深める機縁を造り、東洋平和、人類共存の一翼たらんと努力を誓つたが、昨今の中国の軍事的政治的行動の態度を見るに及んで我々の目的は停滞頓挫を得ない情勢なるを看取した。我々はあくまで究極の両国平和解決を希望するものであるが、今日の情勢では文化的交流もまた躊躇せざるをえないと考へる。日華文化交流のために色々

ご助力を願つた諸氏に諒解をもとめる次第。と同時に、われわれは平和的工作に微力を尽くす覚悟である。尚われわれは近き今後に両国の文化的交流の時期あるを切望する。」

中日文化交流の活動をやむなく停止するとの表明であるが、その理由として、「昨今の中国の軍事的政治的行動の態度を見るに及んで」としてあり、「社告」は、日本の侵略を批判できないだけでなく、中国の「態度」に原因を求める線にまで後退してしまっている。かくして、『星座』は、ファッシズムの時代に中国文学の再認識に踏み出した意味あるこの特集号に、自己保存のためとはいえ汚点をつけてしまったのである。この「社告」の下には、中国現代文学への尊敬の意味をこめて劉峴作「魯迅像」[43]が掲げられたのだけれども。

この瑕疵は、日本語に堪能な胡風には、しっかり読み取られてしまった。この『星座』八月号と矢崎からの手紙に、胡風は返事を出さなかったが、その理由を胡風は二つ挙げている。第一の理由はまさにこのことだったのである。そしてもう一つは、矢崎に対する影響を配慮してのことであった。

那原因是，曾経申明了就是被封也要介紹新文学的《星座》，這時来了一箇〈社告〉，説是「看到了最近中国的軍事政治行動的態度」，他們的計画非停滞不可。我懂得他們的窮迫的情形，但這説法使我大大地不快，……還有，這時候盧溝橋的抗戦已経発生了，日本警察的不講理和無孔不入，我是領教過的，我想他還是得不到我的回信為好。

（その原因は、たとえ閉鎖されても新文学を紹介すると宣言した「星座」が、今になって「社告」を出し、「最近の中国の軍事・政治行動の態度を見て」彼らの計画は停滞せざるを得ないというのだ。彼らの追い詰められた状況は理解しているが、この言い方は大いに不愉快であった…さらに、そのときには盧溝橋の抗日戦争が勃発しており、日本の警察が道理を無視し、あらゆる機会を利用することは、先刻体験済みだったので、かれにとって、

やはり私から返事をもらえないほうがよいと考えた）

六　矢崎の逮捕とその後

日本の警察のやり方を身をもって知っていた胡風の矢崎への配慮も、じつは役に立たなかった。いや、もしも胡風からの日本語の手紙があったならば、それを口実にして矢崎の罪はもっと重いものになっていたのかもしれない。

九月一日、『東京朝日新聞』に、矢崎取調の記事が掲載された。

「警視庁特高一課では数日前から新進批評家矢崎弾氏（三二）を杉並区永福町の自宅から召喚、杉並署に留置すると共に同人雑誌「星座」編集人山本和夫氏（三一）を代々木署に留置、安齋警部、木村警部補が取り調べてゐる。当局の語るところによれば

矢崎氏は藝術に行き詰りを感じ最近急速に左傾化し今春渡支上海滞在中も、王統照、胡風等支那の左翼作家と往来し、帰国後は支那人民戦線派との連繋の下に文学を通じて大衆の左翼化をはかつてゐた嫌疑によるもの」[44]

矢崎は、八月十八日治安維持法違反の嫌疑で東京杉並署に検挙され、翌年の十一月に釈放されるまで、一年三ヶ月拘留されることになる。[45] 続いて八月二十四日には、『星座』編集者の山本和夫も検挙され、『星座』は廃刊となった。[46] 矢崎と山本の肝いりで作られた「同人雑誌倶楽部」も、一九三八年一月、山本により解散届が出されたが、この時には、『人民文庫』など、廃刊に追い込まれる雑誌が続出していた。

矢崎検挙の理由は、「反戦的言辞」と「上海に赴き左翼分子と連絡した」ことであったが、『特高外事月報（昭和

十二年八月分[47]』によれば、「神蔵芳太郎（矢崎弾の本名・筆者）は共産主義を信奉し極力日本主義を排撃し居るものにして、朝鮮、台湾、樺太、満洲、支那と文化提携をなし、文化運動を通じて共産主義思想を宣伝扶植せんとする意図に基づく反戦的言辞と認められ引続き取調中にあり」と最大限に拡大されて扱われたのである。

『特高外事月報』の取調の概要中「矢崎弾の上海における行動」では、「其間在留左翼分子鹿地亙、河野さくら等と数回に亘り会合せる事実ありて或は左翼運動の提携連絡に付密議せるにあらずやと認めらるゝのみならず、魯迅文壇一派の茅盾、胡風、蕭軍、王統照等と会見し日支文化の提携を約したるものなり」とあるが、ここまで見てきたとおり「左翼運動」の「密議」などであるはずはない。矢崎の上海での行動には、新聞記者の日高がずっと付き添っていたわけで、調べる気なら簡単に裏付けも取れるはずである。

検挙の直接的きっかけとなった反戦的言辞とは、八月七日の『星座』の例会で発せられた次の発言であるという。同じく『特高外事月報』の取調の概要中「反戦言辞の内容」には次のような発言が引用されている。

「日支事変の起つた原因は日支相互の政策が悪いからだ、双方今一歩進んだ考えを持つていつたなら戦争をしなくとも幾らでも平和的に解決ができたと想ふ、もう、世界は終りだ、今回の日支問題を契機に世界は必ず二派に分れて第二の世界大戦まで進むと思ふ、夫れから此際日本主義者即ちファッショを徹底的に撲滅して仕舞はないと結局日本主義者の為に日本は滅びて仕舞ふ」

「日支相互の政策が悪い」という言い方は、矢崎の限界であるが、また当時の日本の状況下で許される範囲でのぎりぎりの表現であったかもしれない。「もう、世界は終わりだ」から、矢崎の受けた衝撃の大きさがわかる。将来の世界戦争を予測する洞察力と、それを自らの行動に結び付けて考える姿勢はたしかに矢崎らしく、彼自身の言葉と考

えて間違いあるまい。

そして、こうした認識は、今回の上海旅行で得た自身の体験とそこから導き出された感想なしには生じなかったことであろう。

矢崎が、帰国して「七七」事変以後に書いた「中国で眺めた日本的性格」（『新潮』九月号）は、伏字だらけでずたずたにされて発表されたが、それでも矢崎の思考の一端は覗える。

「最近支那の再認識といふ言葉が日本知識階級に昂揚しつつあるのは事実である。だが、漸く兆しかけた再認識熱もこんどの北支事変で再び政治的好奇心の方向に歪められはしないだらうか。」

「僕は一ヶ月ばかりの上海見物で感じたことは、いかにわれわれが今日の中国について無知であつたか、僕らの支那常識がいかやうにしてそだてられたか」

「僕は上海に行くまで、日本民族とは、よく困窮に堪へて海外雄飛にもつとも適した伸縮性に富み、垣をつくらず、あらゆる障壁をも侵して繁栄できる民族だと信じてゐた。ところが、上海における日本人の生活姿態から以上の予想は完全に裏切られざるをえなかつた」

「順応力、潜入的進出という点において到底日本人は中国人の対手ではあるまい。近代都市上海の騒然雑然たる外観は中国の国家的権力の弱さとか、国際政治経済の相克などといふ抽象的な根拠よりもむしろ、中国民族の生活力の旺盛さに帰せられるべきだ」

「『もののあはれ』も同情心も鎖国的で、国家権力への無意識な安心とたよりない優越心理。結論の即製的なこと、割り切つたレツテルに絶対の信頼を傾ける性癖」

「感情的対立の歯車を廻す悪習から脱出するには、まづ先入観を無造作に信じ、結論に急ぐ日本的性格から背走しなければならない」

以上、引用した断片的言辞は、いずれも自己の体験的エピソードの末尾につけられ、そこから得た感想として語られているものである。

取調では、帰国後に発表されたこうした文章も、おそらく追及されたであろう。『特高外事月報』の取調の概要のうち「帰京後の行動」として、「帰京後山本和夫と諮り『個人の文壇登場を目標とする同人雑誌の時代は過ぎ去り、雑誌を主体として自己を其構成分子として時代文化への抗議、政治暴力の防衛、ヒューマニズムの高揚てふ所謂知識人の団結行動を目標とする同人雑誌時代が来た、『星座』も漸く叙上の軌道に乗り掛けて来たが之を感知した地方の知識人が最近星座の抗議精神と新文化建設への意図を汲み採り頻々と加盟を要求して居る状態である』と称し、同雑誌を通じて共産主義思想のアヂプロを為すべく全国的に亘り読者獲得の為狂奔し居たるものなり。」と書かれている。

ここに引かれた言動も、文学雑誌『星座』の編集態度そのものであり、嫌疑としてもなんら実態をもたない。「共産主義思想のアヂプロをなすべく」という結論は全くのこじつけというべきであろう。

終章　胡風と矢崎の交流が残したもの

胡風は、「憶矢崎弾」の冒頭で、「九一八」の午後に友人から知らされたとして、『申報』の記事[48]のことを書いている。これは一九三七年九月十八日の『申報』第一面に掲載された記事のことである。奇しくも矢崎が検挙されて一ヶ月目

である。

「日本新進作家矢崎弾，最近為警局捕去，雑誌《星座》編輯者山本和夫，亦同時被捕，拠当時称，矢崎今春曾游上海与中国左翼作家王統照、胡風等往来，帰国后，与中国人民戦線派連絡，以文芸謀大衆左翼化，故致被捕」

（日本の新進作家矢崎弾は最近警察当局に逮捕され、雑誌「星座」の編集者山本和夫も同時に逮捕された。当局によれば、矢崎は今春上海へ旅行し、中国左翼作家の王統照、胡風らと交流し、帰国後は、中国人民戦線派と連絡をとり、文芸による大衆の左翼化を企てたことにより逮捕に至ったという。）

その夜、日本軍陣地を攻撃する中国軍の飛行機の轟音を聞いて力付けられながら、胡風はこの記事を読み直し、次のように記した。

「但縈繞在我脳子里不能消去的却是矢崎的鋭敏里帯着誠朴的臉色，再連想到我自己身受過的日本警察的野蛮的拷問的方法，就感到了一種気憤和懐念混合着的感覚的侵襲。」[49]

（しかし私の脳裏にからみついて消すことの出来ないのは、矢崎の鋭敏さのなかにも誠実さを含んだあの顔であった。それに、わたし自身が受けた日本の警察の野蛮な拷問のやり方を思うと、憤りと懐かしさが入り混じったある感覚に襲われるのを覚えた。）

一九三三年三月、胡風自身日本の警察に検挙され三ヶ月間の拘留を経験している。その体験に重ねて矢崎の身を案じ、満腔の同情を寄せてこの文章を書いたのである。『申報』の記事は続けて、「其表面理由雖如此，実則最近凡与中国人交往之日人，俱在恐怖中正当擬大事搜捕也」（表面的な理由はかくの如くであるが、実際は最近中国人と交際する日本人はすべて、恐怖のなかで大事を企てているとして捜査逮捕されるのである）という冷静な判断を示している

が、胡風はこのことに触れていない。矢崎を知る友人石川達三は、次のように述べている。

「矢崎という男は刑事に好感をもたれるたちではなかった。刑事が意地悪をする気になれば、何ヶ月も留置場に入れておいて、公判にもかけないということができた…何のために捕まっていたのか今以てわからない…要するに矢崎は特高警察によって殺されたのだと私は思っている。警察の中で死んだのではなかったが、精神的にも肉体的にもすっかり駄目になってから釈放された。[50]」石川自身も翌年『中央公論』に「生きてゐる兵隊」を書いて発禁処分になった後、やはり特高の取調を受けた。「つまり特高刑事が文化指導までやろうとしていた。恐るべき時代だった」と書く所以である。

石川は、矢崎の人となりを、「気骨稜稜、何ものにも屈しないような我の強さをもちながら、一方では羽目をはずしたバガボンド（vagabondo放浪者）であり、放蕩無頼であり、元来ならば私はそういう男とは友達にならないたちであったが、どういう訳か矢崎とは交友が続いた。彼は我が強いくせに他人の我の強さをも許すところがあったらしい[51]」と評しているが、「放蕩無頼」は別として、胡風の性格に一脈通じるところがあるように私には感じられる。こうした時代には往々にして最初の犠牲者となる。

この文の末尾を、胡風は次のように結んでいる。

「矢崎被捕后的結果怎様呢？我想只有両条路：不是日本政府用恐怖手段使矢崎和《星座》屈服，放棄対於中国文学的敬意甚至賛成侵略中国的強盗行動，就是矢崎固守自己的思想立場，弄得本身入獄，《星座》倒掉。但無論是那条路，結果同様是摧残了矢崎和《星座》的人道主義的進歩的文学活動。圧迫民衆和侵略中国是日本帝国主義的強盗政策的両面，一切為文化的進歩而工作的日本知識分子們，応該向這箇屠殺文化的政府投去堅決的反抗。[52]」

（矢崎は逮捕された後、結局どうなるのであろうか。わたしは、日本政府が恐怖の手段を使って矢崎と「星座」を屈服させ、中国文学に対する敬意を放棄し、中国侵略の強盗政策に賛成するまでにさせてしまうか、そうでなければ、矢崎が自分の思想的立場を堅持し、そのことで自分は投獄され、「星座」は潰されるかのどちらかだと思う。しかし、どちらであろうと、結果として矢崎と「星座」の人道主義的進歩的文学活動が破壊されるのは同じである。民衆を圧迫することと中国を侵略することは日本帝国主義の強盗政策の二つの側面であり、文化の進歩のために活動するすべての日本の知識分子は、この文化を殺戮する政府に対し断固とした反抗に立ち上がるべきである。）

胡風が言ったとおり、『星座』は潰され、矢崎は一年三ヵ月の間拘留された。この年の末には人民戦線事件があり、共産主義者に限らず、戦争を遂行する上で障碍となる思想はすべて弾圧されることとなったから、この時点で、胡風の呼びかけに応えられるものはいなくなった。

矢崎はそして『星座』は、いったい胡風のいう二つの路のどちらを歩んだといえばよいだろうか。その答えをいうのはなかなか難しいことである。このとき胡風の脳裏には、「転向」のイメージがあったにちがいない。中国の左翼文学の経験と日本のプロ文学運動がともに直面した経験であり、胡風はその両方を視野に入れていた。実際に矢崎が直面していたのは、以前にも増して厳しい軍国主義の思想統制の時代であった。表面的に見る限り、矢崎は屈服したようにも見えるが、そもそも嫌疑がなりたたなかった可能性もある。ともかく、また社会に戻って文学研究の路を進み、『文芸の日本的形成』（1941）、『転形期文芸の羽搏き』（1941）、『近代自我の日本的形成』（1943）などの著書を出した。そして敗戦後の一九四六年八月、拘留中に得た胸部疾患のため四十一歳の若さで死去した。その間、彼が、「日本的なもの」の追究に終始したことは確かである。それはしかしけっして時局に便乗するようなものではなく、矢崎

自身自らの信念を曲げることなく貫く戦いとして意識されていたようである。一九四三年発行の『近代自我の日本的形成』のあとがきで、矢崎は「独創的、個性的に生きる事と、国家的、国民的に生きる事とが、文学的に解決されたであろうか」と振り返り、「現代のこのような歴史の抹殺、主体性の喪失による漂流、対立、盲進の渦に対して、私はみづからの微小なる訂正とその作業をここからはじめたのである」と結んでいる。

一九四〇年四月の壷井栄の著書の出版記念会の合同写真[53]には、中野重治、宮本百合子などプロレタリア文学運動に参加した多くの作家にまじって矢崎弾の姿が写っている。また敗戦後に、プロレタリア文学運動の流れを汲む人々によっていち早く結成された「新日本文学会」とも関係をもったが[54]、病弱の彼には、「民主主義的文学」のために活動する時間はすでにほとんど残されていなかった[55]。

胡風は抗日戦争の開始の時期に、中日両国の文学交流を目指そうとした一人の日本の文学者のために、文化を破壊する野蛮な日本の政府への抗議の文章を書いた。

その文学者は、必ずしも左翼文学（プロレタリア文学）を目指していたものではなかった。矢崎は、上海で、「ヒューマニズム」という言葉を用いて自身と日本の文学状況を説明した。それは、「プロ文学の弾圧による後退の一抵抗の方法」であり、「現今の政情に刺激されたインテリの良心の自覚の表現」と説明された。その「良心の方向は」と問われて、「文化の擁護であり、人類の正義と自由のため」であると答えた。矢崎は、「日本の進歩的作家が最初時代的熱情の赴くままに新鮮な題材を矢つぎ早に描破し、大衆の関心を狼火の如く燃やしつけながら、一度現実の変化に見舞われると、題材の衰えリアリズムの方法的退化を招いて窒息した」ことを引いて、中国文学の現在に危惧を表明し、「日本におけるプロ文学の、勃興期、転向期、退潮期の三現象を如実に凝視することも徒爾ではない」と胡風に力説

した。[56] この時点ではおそらく胡風は基本的には、受け入れがたいと感じたに違いない。しかし、その後の推移を見れば、胡風の認識の底にある題材主義批判やリアリズムの方法への注目とつながる発想であることを理解していたに違いない。両者の間に多くの認識の違いやすれ違いはあったにもかかわらず、短期間のうちに友情が芽生え信頼が生まれていた。とりわけ、文壇の惰性に流されない新しい力を求め、しっかりとした編集方針をもった個性のある雑誌を経営することで二人は共通していた。日本の侵略戦争によって、断ち切られたとはいえ、この経験は両者に影響を与えたといえるのではないか。私は矢崎の残した次の言葉はその後に進行した事実に照らしてみて、いまなお色あせていないと思う。

「魯迅亡き後の彼らの苦悩は予測に難くない。かういふ進歩文学の苦難過程は中日共に同一の軌道を辿つてゐる。僕らが微力を省みず日華文学の交流を作図するのも結局両国に於けるヒューマニズムの弾力ある成長を希望するためであり、近接する両民族が人類の共通目標に沿って進歩の階段をよぢ昇るため知識人の協力を熱望するが故だ。[57]」

［付記］本稿は、二〇〇五年十一月北京大学で行われたシンポジウム「左翼文学の時代」での発表原稿をもとに、改訂を加えたものである。（二〇〇六年九月二十五日）

1　矢崎弾（明治三十九年二月一日～昭和二十一年八月九日）新潟県佐渡郡吉井村大字長江一〇八七番地生まれ、本名神蔵芳太郎（かんぞう　よしたろう）。

2　胡風「憶矢崎弾――向摧残文化的野蛮的日本政府抗議」『七月』（上海）第三期（一九三七年九月二十五日　七月社）；『七

月』（漢口）第一期（一九三七年十月十五日）；『棘原草』，重慶，一九四四年；『胡風全集』第四巻，五十五頁。

3　胡風「回憶参加左連前後[四]」，『新文学史料』一九八五年第一期；『胡風回憶録』六十七頁，一九九三年，人民文学出版社；『胡風全集』第七巻三百四十五頁。

4　胡風「我做的一些中日文化交流工作」，『江海学刊』一九八四年第四期；『胡風全集』第七巻二百二十頁。

5　矢崎に関する先行研究は以下のとおり、今回たいへん参考にさせていただいた。

渡辺憲「矢崎弾」『新潟県郷土作家叢書　2　社会派の文学』一九七六年、日本近代文学会新潟支部編、野島出版。矢崎の写真は野島出版の好意により本書から採録。（写真一）参照。

渡辺憲「昭和一〇年代における矢崎弾の批評活動覚書――作家論の場合――」『昭和文学研究』第三輯（一九八一年六月）

中矢誠『矢崎弾、その乱反射する鏡像』及び『矢崎弾 論文等目録』一九九五年、鳥の飛翔通信社。

6　渡辺憲「矢崎弾」百七十七頁。

7　中島国彦「矢崎弾」，『日本近代文学事典』第三巻，日本近代文学館編，一九七七年。

8　この『上海日報』の記事は、渡辺憲「矢崎弾」（注五参照）より再引用。渡辺氏は、矢崎の実家の保存していた切抜きを引用したという。一九三七年五月十五日の『上海日報』には、「新鋭文芸評論家矢崎弾氏あす来滬」の見出しのもと、「矢崎氏は最近文壇の一話題となつてゐる『日本的なもの』への復帰についてかねて一家の見を持ち評壇でもすでにしつかりした地歩を築いてゐる人」とあり、この方がより正確といえる。上海到着の翌日の『上海日報』は、「文芸評論家矢崎弾氏来る」の見出しで矢崎の談話を載せ、「中国の若い詩壇劇壇人と会つて種々意見をうかがひ、中国文壇の近況を見また聴かして貰はうと思つてゐます」とある。

9　小松清「現代法国文学的転機」，『胡風全集』第八巻。初出は『時事類編』第二巻第二十四期（一九三四年十月二十五日）訳者筆名、張果。

大森義太郎「現代知識階級的困惑」,『胡風全集』第八巻。初出は『時事類編』第三巻第一期（一九三五年一月十日）訳者筆名、張果。

10　矢崎弾「上海日記抄」,『星座』一九三七年七月号。

11　矢崎弾「続上海日記抄」,『星座』一九三七年八月号。

12　石川達三『心に残る人々』七十八頁、二百二十一頁。一九六八年十二月 文芸春秋。

13　渡辺憲「矢崎弾」『社会派の文学』は、「石川達三の記憶によると、最初から弾が『星座』に関係していたように聞こえるが、これは正確ではない。…本格的に主宰するようになるのは昭和十二年に入ってからである」とする。実際の雑誌に即した（一九三七年七月号分まで）研究紹介としては紅野敏郎「星座」上、中、下（「逍遥・文学誌」『国文学』一九九八年八月号、九月号、十月号）があり大変参考になる。

矢崎弾『秋山正香宛書信』,さいたま文学館所蔵。一九三五年一月十五日の葉書に、「中岡（宏夫：筆者）の道具になるのはのはこれから止めた。「エキテイ（駅逓：筆者）」はこれ以后僕中心の同人誌にあらためるつもり」とあるのを最初として、新雑誌の資金調達や同人候補の選定を進め発刊にこぎつけた様子が確認できる。矢崎には、『星座』の一周年を記念しての「星座の履歴」という文章（『星座』一九三六年四月号）もあり（紅野文で触れる）、これらを読む限り、矢崎が「星座」を主宰したことは間違いないが、この件については稿を改めて論じることにしたい。

14　改造社『大魯迅全集』全七巻。編集顧問に、茅盾、許景宋（広平）、胡風、内山完造、佐藤春夫。一月に『大魯迅全集出版案内』を出し、二月より刊行開始した。胡風は、編集に参加、第三巻、第四巻、第五巻の解題を執筆するほか、鹿地亘の翻訳に協力している。第七巻の書簡も胡風が選択した。

15　『報知新聞』の「文学者の対支関心」は、一九三七年一月十九日から二十七日にかけて、張赫宙の「中国女性の抗日」「中国人の思想混乱」「国防文学の正体」、中野重治の「二つに分かれた支那」「日支文学の連繋」「死せる魯迅を憶ふ」、佐藤春夫の

「感傷的な感懐」「中国の社会的観念」「相互の先入観」を、九回連続で掲載した。

16　五城康雄「日支文壇の交流を望む」『星座』一九三七年三月号（三月一日発行）。五城康雄作，陳琳訳「対於中日文壇交流的希望」『文学』，第九巻第一号（一九三七年七月一日）

17　中国文学研究会の機関誌『中国文学月報』第二十四号（一九三七年三月一日）の「会員異動（一月）」の欄には、入会者として「千葉県館山北条町新壇場 矢野兼武」の記載がある。

18　『竹内好全集』第十五巻「北京日記（一九三七年）」「二月十七日（水）」に「夜、学士会館に明治文学会に行く。増田渉氏の魯迅の話あればなり。会より吉村、永瀬両氏見えたり。主計少佐矢野某氏留守中に来り、会場に寄らる。散会後、吉村氏と同道にてその意見をきく」とある。

19　日本詩人会 詩人相互の親睦と詩の向上、詩人の文化的寄与を目的に昭和八年成立。昭和十二年二月現在の会員百二十四名、五城康雄の名も見える。『文芸年鑑（一九三七）』によれば、昭和十年の活動として、新居格より「事変後に於ける中華民国文学の現状」を、周作人から「日華文学の現状」を聴取した。また、昭和十一年度事業には、日本詩作品の海外紹介も上がっている。

20　東京詩人倶楽部 一九三六年二月成立。会員三十二名。長田恒雄を常任幹事とし幹事は日本詩人会の幹事とほぼ重なる。五城康雄詩集の編者月原橙一郎や星座同人の田中令三や山本和夫が幹事として名を連ねている。

21　この手紙は、歓迎の意を表する王統照の返事と同時に『文学』に掲載された。

五城康雄「五城康雄先生来信」，王統照「編者復信」『文学』第八巻第四期（一九三七年四月一日）

22　『星座』一九三六年四月号は、「詩人クラブについて」という小特集を組み、東京詩人倶楽部は会長の長田恒雄が、日本詩人会は、五城の友人である月原橙一郎が紹介の文章を寄せている。

23　一瀬直行「五城康雄詩集を読む」『地上楽園』五巻十一号（一九三〇年十一月）

24　五城康雄に就いては、山岸嵩氏に優れた先行研究がある。山岸によって、五城康雄は、本名矢野兼武であること、第一次上海事変後、旗艦出雲の主計士官として上海に滞在していたこと、磯貝修二の名で中国について語り小説を翻訳し、古浜修一の名で中国現代文学の小説集『夜哨線』を出していること、その後、中国南部から南方勤務に転じ、西村皎三の名で『詩集遺書』や『火の国』などの戦争詩を書いたことなどが明らかにされ、その大戦中の宣撫活動、詩作と翻訳が、軍人としての生き方との関連のなかで位置づけがなされている。

山岸嵩「占領地におけるある日本語教師――海軍主計士官矢野兼武と中国――」『日本工業大学留学生別科紀要』二〇〇四年。

山岸嵩「占領地におけるある日本語教師 その二――海軍主計士官矢野兼武の翻訳したもの」『日本工業大学留学生別科紀要』二〇〇五年。

山岸嵩「反戦詩と讃戦詩のはざま――五つの名を持った軍人詩人の作品と生涯――」（上）（下）『世界文学』No. 101,102（二〇〇五年六月、二〇〇五年十二月）

25　矢崎弾「上海日記抄」,「続上海日記抄」,『星座』一九三七年七月号 ,八月号。胡風の娘暁風氏に調査を依頼したところ、胡風旧蔵書中から矢崎の毛筆の献辞がある当該著書が発見された。（写真二）参照。

26　胡風「憶矢崎弾――向摧残文化的野蛮的日本政府抗議」、『七月』（上海）第三期（一九三七年九月二十五日 ,七月社）

27　矢崎弾「中国の新文学について」『星座』一九三七年八月号。

28　小田嶽夫訳『大過渡期』、第一書房、一九三六年八月。茅盾の『蝕』三部作のうちから、小田の判断により、「動揺」と「追及」のみが訳され、好評を博した。

29　矢崎弾「中国で眺めた日本的性格」『新潮』一九三七年九月号。

30　矢崎弾「上海日記抄」（五月二十三日）、『星座』一九三七年七月号。

31　矢崎弾「上海日記抄」（五月二十九日）、『星座』一九三七年七月号。写真は二十三頁。（写真三）

32 矢崎弾「秋山正香宛葉書」、一九三七年六月十五日、さいたま文学館所蔵。
33 矢崎弾「中国と支那」『朝日新聞』一九三七年六月二十一日。九面。
34 矢崎弾「中国の新文学瞥見」、『報知新聞』一九三七年六月二十五日から二十九日。
35 矢崎弾「中国作家との会見――茅盾・張天翼との問答」（六月二十日執筆）、『三田新聞』一九三七年六月二十五日。
36 この版画は、実は『文学』第八巻第五号（一九三七年五月）に掲載されていた版画（木刻）の一枚で、陳煙橋の「救亡（民族の滅亡を救う）的歌声」という作品であるが、題名を含め詳細は伏せられている。（写真四）（写真五）参照。
37 「文化消息」『中国文学月報』第二十九号（一九三七年八月一日）。
38 胡風「私の気持」『星座』一九三七年八月号。この資料は、飯田吉郎氏によって発見され、同氏編『現代文学研究文献目録 増補版』（一九九一年、汲古書院）に、口絵写真及び項目としてとり上げられた。筆者は、飯田氏より複写の提供をうけた。記して謝意を表する。（写真六）参照。
39 胡風編「工作與学習叢刊」『収穫』（一九三七年五月十日発行、生活書店）。胡風の「『工作与学習叢刊』始末」によれば、魯迅没後に魯迅精神を受け継ぐべく雑誌の刊行をめざすも、国民党の雑誌登録許可を得られる可能性がないので叢刊の形態をとった。全四期のうち『収穫』は第三期にあたる。
40 中村武羅夫は「誰だ？花園を荒らすのは！」で、反プロレタリア文学の代表的評論家。矢崎との接点がどの辺にあるのか興味がもたれる。筆者所有の矢崎の著書に、中村武羅夫旧蔵のものがあり、矢崎の自筆の献辞から両者に直接の接点のあったことがわかる。
41 『星座』第二輯（一九三五年五月号）「編集後記」及び『星座』第五輯（一九三五年八月号）「編集後記」
42 「近代出版側面史」『日本近代文学事典』第六巻百八十三頁。
43 劉峴「魯迅像」この木版画は、劉峴『木刻新輯 続編』（春火芸術出版社、一九三七年、町田市立国際版画美術館所蔵）所収

の一枚よりとられたと推定できる。なおこの輯には、一九三六年十二月記とする「前記」がついている。劉峴はこの時、日本留学中であった。（写真七）（写真八）参照。

44 『東京朝日新聞』一九三七年九月一日第二面、「評論家矢崎弾氏 反戦演説で取調 渡支前後の事情も」

45 中矢誠『矢崎弾、その乱反射する鏡像』一九九五年、鳥の飛翔通信社。釈放の日時の根拠は示されていないが、たしかに一九三八年中は、何も執筆していない。『日本学芸新聞』六十一号（一九三八年一二月一日の「学芸往来」欄には「矢崎弾氏無事釈放となった」の記事が見えることから十一月中には釈放とするのが妥当であろう。また、秋山正香宛十二月五日の葉書に「矢崎弾を励ます会」が十二月十日に開かれることが書かれている。「日本学芸新聞」六十二号（一九三九年一月一日）に、「矢崎弾氏を励ます会」の記事があり、「永い間不自由の環境から釈放されて新たに文学活動を開始する矢崎弾氏の再出発を励ます会が、十日夜友人知己五十余名集つて開かれた。片岡鉄平、丹羽文雄、間宮茂輔、戸川貞雄、石川達三等々のメンバー」とある。

46 『星座』は現在のところ八月号までしか確認されていない。九月号が準備されていたことは確かだが発行は未確認。ただ、一戸務は「支那の木刻流行」『現代支那の文化と芸術』（一九三九年十一月、松山房）のなかで、「同人雑誌『星座』九月号の巻頭に支那で今、流行している木刻（版画）が転載されてゐるのが目に留まつた。これは支那の文芸雑誌『文学』に載せられてゐた版画である」と書いており、その可能性は大きい。一戸の描写する版画の内容と一致するものは『文学』第九巻第一期（一九三七年七月号）中に確認できる。田無災刻「被威脅的古城（脅かされる古城）」という版画である。上空を日の丸をつけた飛行機が飛び、城壁の下を日の丸を掲げた軍隊が行進しているのを手前から母と子が眺めている図である。一戸は「その軍隊のもつている旗は白旗になつてゐる…日の丸を変へて了つたのである」と指摘し、「こんな版画が、ついこの間まで支那の雑誌に記載されてゐたのかと思ふと、我々日本人はその無理解さに唖然とせざるを得ない。風刺の積りか抗日侮日の考へなのか、その辺の製作感情は知る限りでもないが、随分けしからぬ画題である。又、その版画の一部を変えて転載してゐる『星座』の意味も随分変な限りである」と批判している。原画の製作意図は表題の通り明確であり、『星座』掲載の当初の意図も、中国文化の現状

を伝えるという点にあっただろう。日の丸を削ったとすれば、原作者の意図を変更したことになり、編集部の意図が問われることになる。この点の検討は今後の課題として残る。（写真九）参照。

47 『特高外事月報（昭和十二年八月分）』は、内務省警保局により、特高警察関係の極秘資料を報告用にまとめたもの。もとは『特高月報』であるが、この時期は、『外事警察報』と合体して『特高外事月報』となっていた。特高は特別高等警察の略称、内務省直轄で思想犯罪に当った。

48 「東京民衆覚悟 反軍閥空気濃厚」,『申報』一九三七年九月十八日,第一版。

49 胡風『憶矢崎弾――向摧残文化的野蛮的日本政府抗議』、『七月』（上海）第三期（一九三七年九月二十五日,七月社）

50 石川達三『心に残る人々』八十一頁、文芸春秋刊、一九七八年。

51 石川達三『心に残る人々』七十八頁、文芸春秋刊、一九七八年。

52 胡風『憶矢崎弾――向摧残文化的野蛮的日本政府抗議』、『七月』（上海）第三期（一九三七年九月二十五日,七月社）

53 壷井栄著『暦』出版記念会は、一九四〇年四月二十九日、東京新宿の宝亭で開かれ、紀念撮影がされた。日本近代文学館所蔵の写真から六十二名の出席者が確認できる。出席者は外に、江口渙、佐多稲子、上野壮夫、壷井繁治、原泉、秋田雨雀、田辺茂一、遠地輝武、高見順、平野謙等。

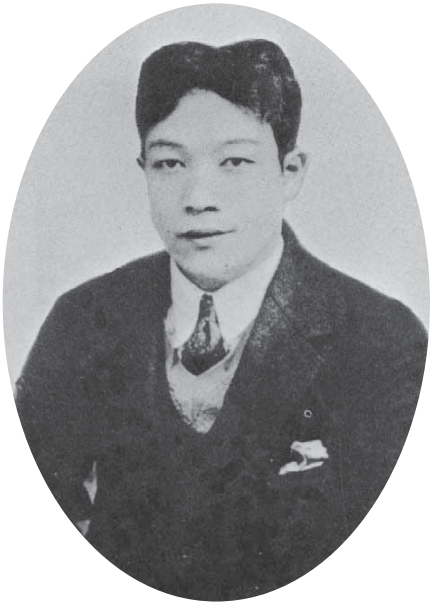
54 矢崎は「戦時下文学における科学観の分裂について」を『新日本文学』一九四六年六月号に、「日記でもよい」を同誌八月号に掲載している。また、新日本文学会編の『東京の一日』（一九四六年八月）に「ある隣組の話」を載せている。

55 矢崎は、一九四六年八月九日、胸部疾患のため東京小石川区雑司が谷の帝大病院分室で四十一歳の生涯を閉じた。（渡辺憲「矢崎弾」）

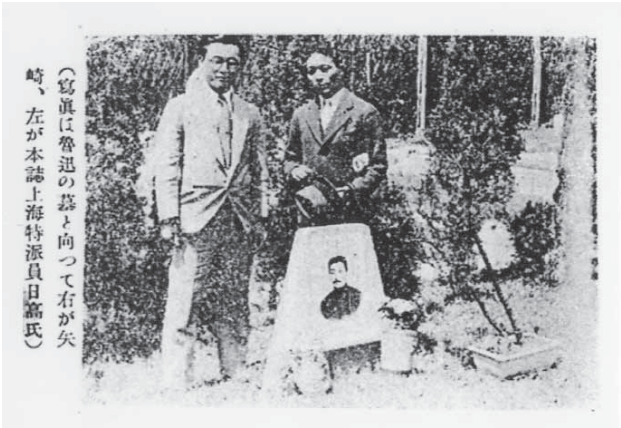
56 矢崎弾「中国の新文学について」『星座』一九三七年八月号。

57 同上。

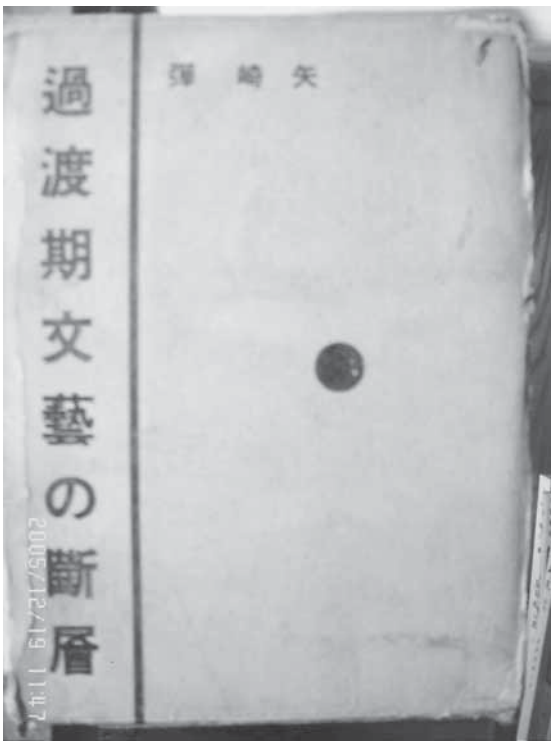
［付記二］本稿入稿後、台湾作家楊逵を研究する横地剛氏から、『星座』九月号の存在をご教示いただき、関連部分の複写の提供を受けた。扉の木版が本稿の想像通りであったことを除けば、扉の「北支事変とヒューマニズム」、巻頭言「昭和日本のために――大日本地図を忘れた日本主義者」、特集「民族主義を再検討する」、矢崎弾「季節の断層」（悪時代と文学精神、同人雑誌の転回）など、日中戦争の勃発に対する矢崎と『星座』編集部の果敢な問題提起と態度は、私の想像を超えて、視野が広くかつ堅固なものであった。日本主義を批判し、地方（国内に限らず、台湾、朝鮮、満州を包含する）への連帯のまなざしも確かなものと見受けられるが、詳細な検討は今後の機会を持ちたい。横地氏は胡風、矢崎と楊逵との関連を明らかにする論文を完成された。氏の研究に大いに啓発されたこと今後の研究協力を約したことを記して謝意を表したい。

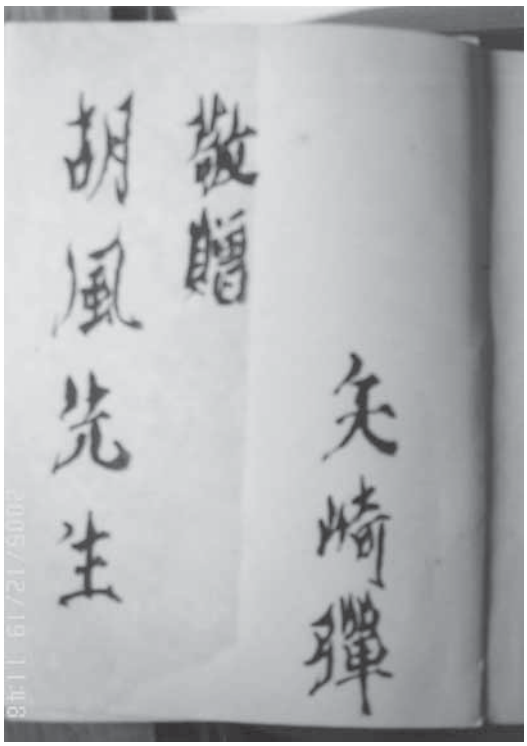


（写真一）　矢崎弾像。
引自『新潟県郷土作家叢書２社会派の文学』

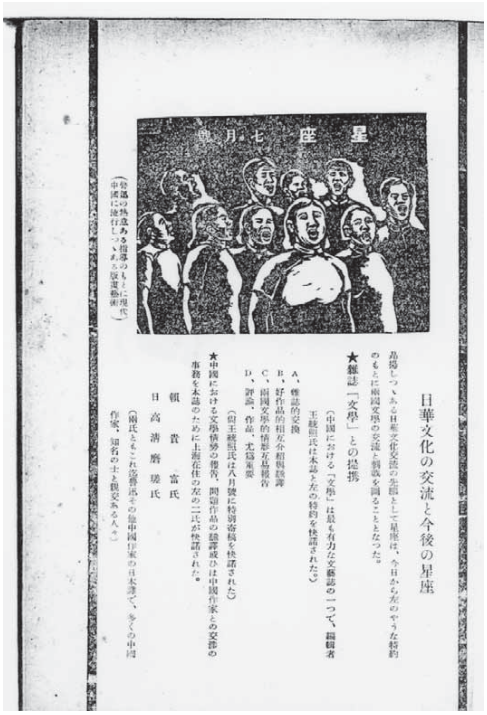


（写真三）　1937年５月29日
上海紅橋路の魯迅墓にて。
引自『星座』1937年７月号。





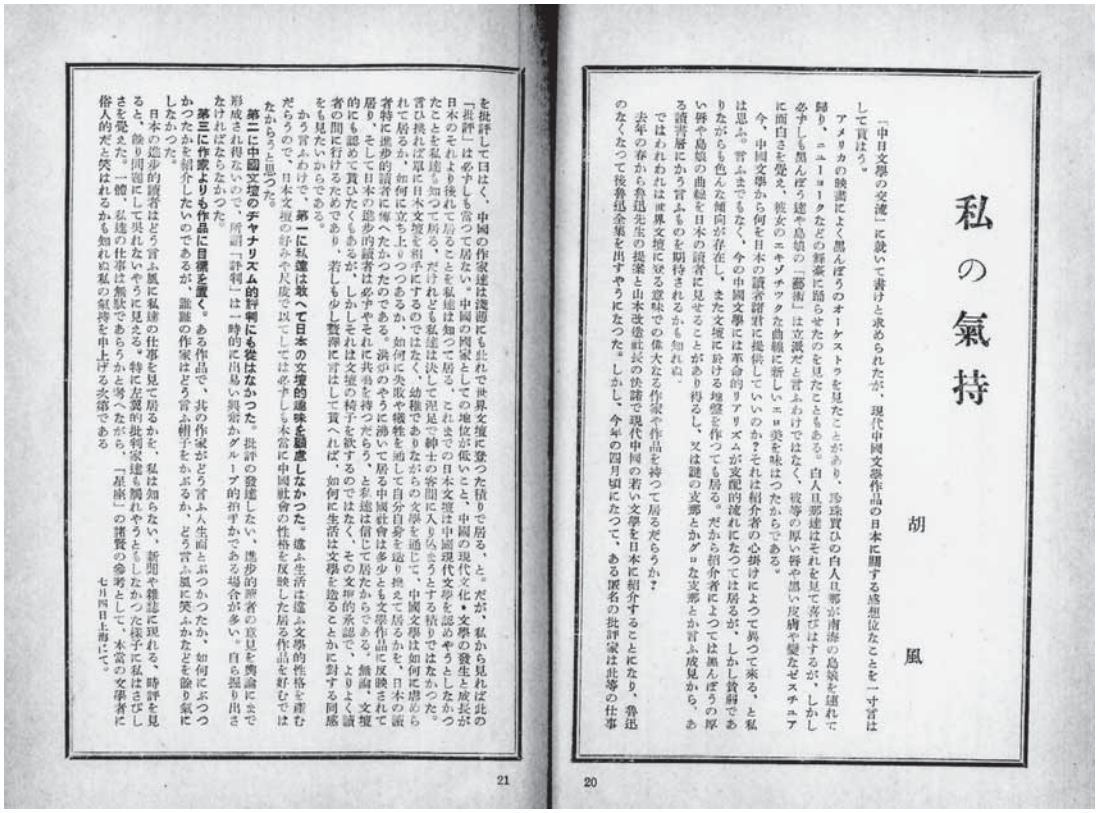
（写真二）　胡風旧蔵書中の矢崎の著書。右は見返りに記された矢崎の献辞。



星座　七月號

（写真四）『星座』1937年７月号巻頭

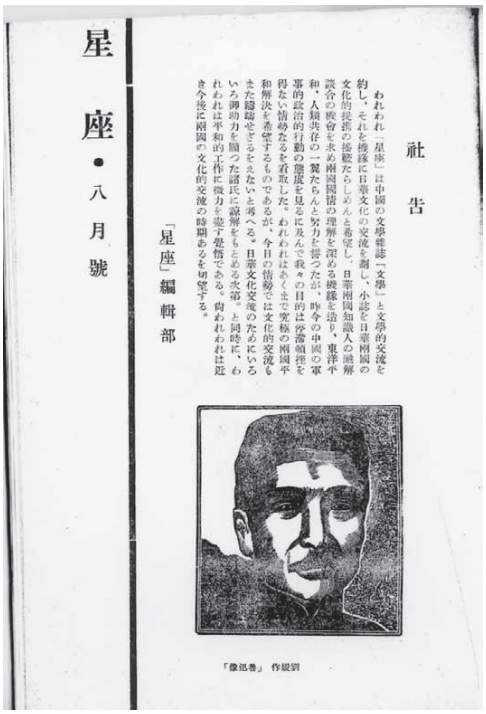
（写真五）　陳煙橋刻「救亡的歌声」
『文学』第８巻第５号（1937年５月）



私の氣持

胡風

（写真六）　胡風「私の気持」『星座』1937年８月号



星座・八月號

社告

われわれ「星座」は中國の文學雜誌「文學」と文學的交流を約し、それを機縁に日華文化の交流を謀し、小誌を日華兩國の文化的提携の揺籃たらしめんと希望し、日華兩國知識人の懇談会の機會を求め兩國民衆の理解を深める機縁を造り、東洋平和、人類共存の一翼たらんと努力を誓つたが、昨今の中國の軍事的政治的行動の發展を見るに及んで我々の目的は殆ん頓挫を得ない情勢なるを看取した。われわれはあくまで究極の兩國平和解決を希望するものであるが、今日の情勢では文化的交流もまた認識せざるをえないと考へる。日華文化交流のためにいろいろ御助力を願つた諸氏に諒解をもとめる次第。と同時に、われわれは平和的工作に微力を盡す覚悟である。尚われわれは近き今後に兩國の文化的交流の時期あるを切望する。

「星座」編輯部

「魯迅像」 作劉岘

（写真七）『星座』1937年８月号巻頭

（写真八） 劉峴刻「魯迅像」
『木刻新輯続編』（1937年）

（写真九） 一戸努のいう『星座』1937年９月巻頭の版画と思われるもの。
田無災刻「被威脅的古城」『文学』第９巻第１期（1937年７月）